



II. 有形文化財

繪画

彫刻

工芸品

書跡・典籍

古文書

考古資料

歴史資料

国宝(平18.6.9)

りゅう きゅう こく おう しょう けい かん けい し りょう

琉球国王尚家関係資料

一、工芸品

一、文書・記録類

工芸品85点 文書・記録類1207点 附 文書箱1合



王様の衣裳や漆工・金工・陶器類や、琉球の歴史を明らかにする文書・記録類がたくさんあるんだね。



工芸品85点、文書・記録類が1207点、国宝に指定されるほど、琉球国の歴史を研究する上では欠かせない、貴重なものなんだよ。



琉球の文化、芸術、制度を伝える貴重な資料群



■王冠(付簪)



■赤地龍瑞雲嶮山文様緇珍唐衣裳





御玉賞(ウタマヌチ)

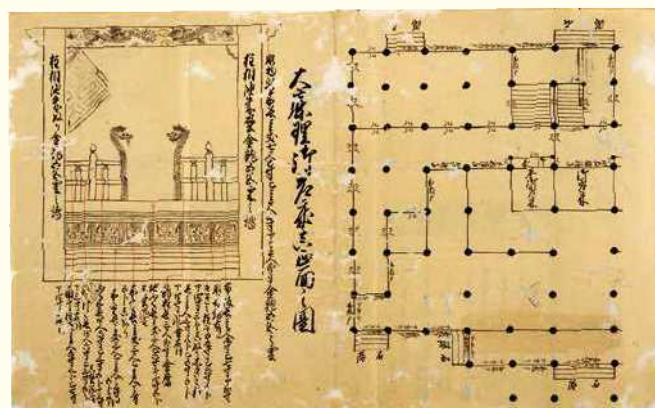
銀杯

御籠飯(ウクファン)

美御前御揃(ヌーメーウスリー)



唐坡豊絵図(左)と首里城正殿正面図(右)(百浦添御普請絵図帳)



大庫埋御差床真正面之図

指定名称にある「尚家」は、1470(成化6)年に初代尚円王が即位してから、1879(明治12)年の琉球処分により最後の王となった19代尚泰王まで、400年以上続いた琉球国の王家で、第二尚氏とも呼ばれます。

この資料は尚家が継承してきたもので、16～19世紀の工芸品と、18～19世紀の文書・記録類から成ります。工芸品には、王冠、皮弁服、紅型、漆器、刀剣等が含まれ、いずれも王家伝来

品ならではの優れた作品です。文書・記録類は幕藩体制下での薩摩藩との関わりや、中国との冊封・進貢関係を示し、独自の国家体制を形成した琉球国の東アジアにおける政治・外交史上にも貴重な内容を持っています。

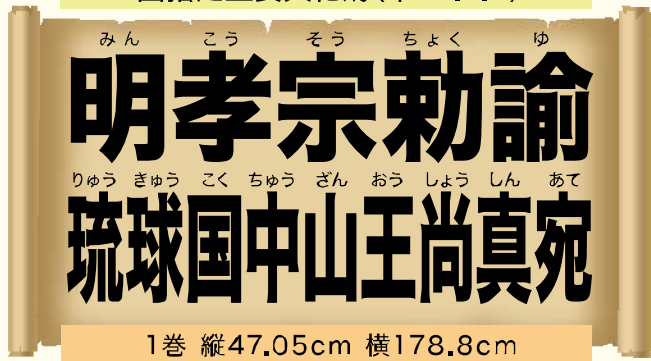
本資料については、まず2002(平成14)年に、工芸品とその付属文書が国の重要文化財に指定され、続いて2006(平成18)年に文書・記録類が追加された上で国宝指定されました。

【参考文献】

文化庁協力、2019年、『国宝事典』、便利堂
那覇市歴史博物館編、2006年、『国宝「琉球国王尚家関係資料」のすべて』、沖縄タイムス社

(写真提供：那覇市歴史博物館)

国指定重要文化財(平11.6,7)



五爪の龍の絵が描かれています。紙に書かれていますね。中国皇帝の権威がわかる手紙なんだね。

五爪の龍は、中国皇帝の象徴といわれているんだ。琉球国王は、四爪だよ。



中国皇帝から琉球国王への手紙



■明孝宗勅諭 琉球国中山王尚真宛

中国明時代の皇帝孝宗から第二尚氏三代尚真王にあてた勅書です。尚真王が冊封を感謝して中国に使者を派遣した際、1486(成化22)年に憲宗皇帝が死去し、新しい皇帝となる孝宗が即位しました。新しい皇帝が即位すると、周辺の冊封国の国王達に勅諭を贈る決まりがありました。

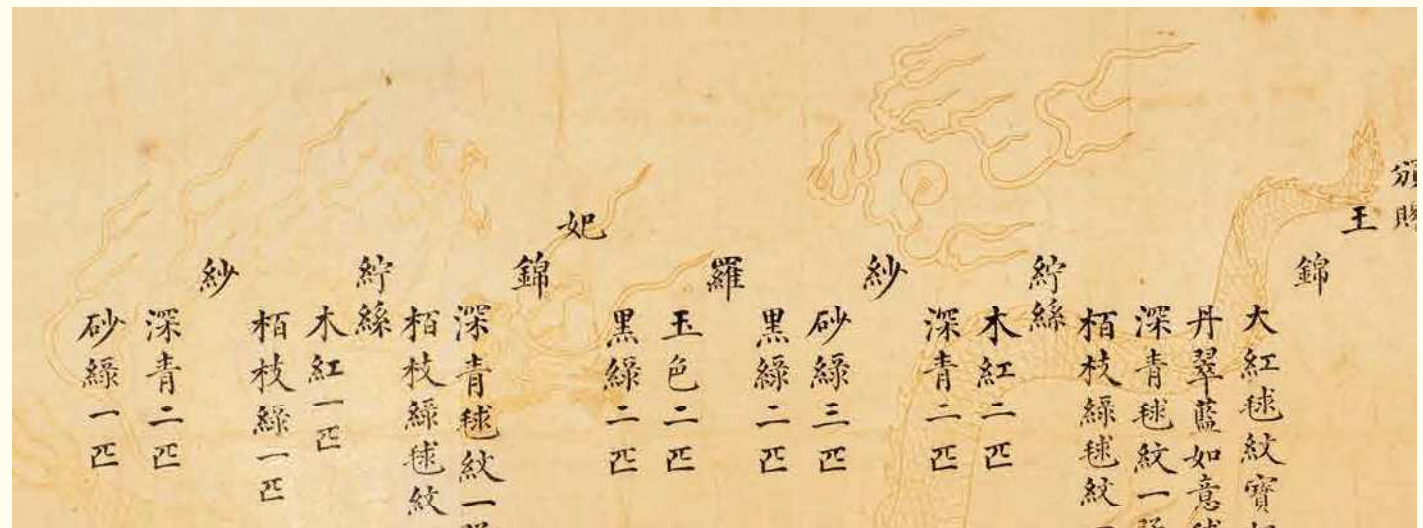
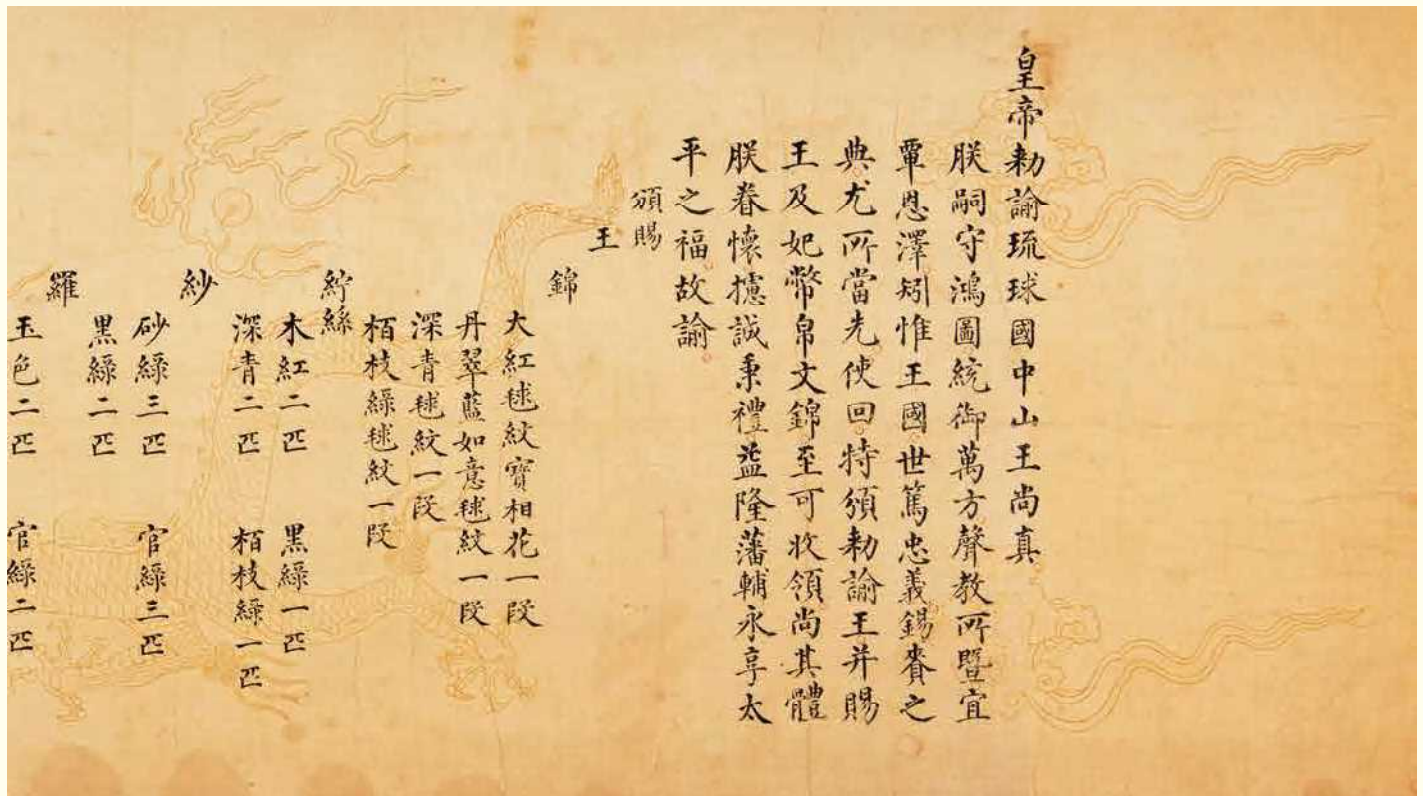
この勅諭は、はじめに皇帝から文書を記し、国王及び王妃に贈られる錦や紗、羅の礼物を列記した目録が続きます。

勅書が書かれた用紙は唐紙で、その中央には右を向き火炎を吐いた五爪の龍と、紙の四隅には瑞雲の模様が、金泥の線で描かれています。末行には、皇帝の印を示す「広運之宝」が押され、その上に「成化二十三年十二月二十五日」(1487年)の文字が書かれています。

琉球国王あてのものとしては、完全な形で残る勅諭として、琉球・中国の交流史の研究上で極めて重要な資料です。



皇帝の印を示す「広運之宝」、その上に「成化二十三年十二月二十五日」



背景に右を向き火炎を吐く龍

りゅう きゅう げい じゅつ ちよう さ しゃ しん かま くら よし た ろう さつ えい

琉球芸術調査写真鎌倉芳太郎撮影

一、ガラス原板

一、紙焼付写真 附 調査記録(鎌倉ノート)

ガラス原板1,229枚 紙焼付写真851枚 調査記録(鎌倉ノート) 81冊



戦前の写真だけど、
すごく鮮明に
写っているね。

鎌倉芳太郎は、首里城が壊されるのを防いだ一人なんだ。尚家の人たちと親しく、所蔵する品々の撮影を許可されたんだ。また、紅型や藍型等型絵染の研究で、戦後になって「型絵染」保持者として人間国宝に認定されたんだよ。



戦前の沖縄の様子をつたえる貴重な写真



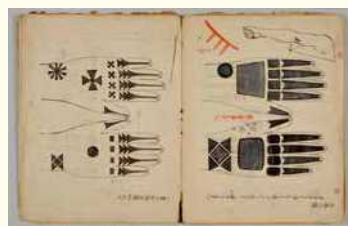
沖縄調査で撮影したガラス原板とガラス原板を入れた木箱



ガラス原板/四ツ切(305mm×234mm)・キャビネット(180mm×130mm)



①ノートに記されたノロ



②ノートに記された針突(ハジチ)



③鎌倉芳太郎琉球芸術調査記録ノート(鎌倉ノート)



④円覚寺 三門 正面



⑤辻原の亀冢墓



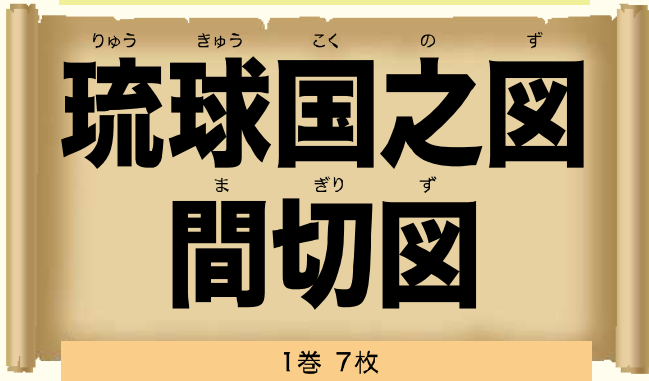
⑥与喜屋のろくもいの神出正装

鎌倉芳太郎が、1924～1926(大正13～15)年にかけて行った琉球芸術調査の成果を示す資料です。琉球芸術調査とは、琉球王家や名家、寺社が所蔵する各種文化財の調査で、当時としては珍しい写真撮影も一緒に行われていることが大きな特徴です。鎌倉氏が撮影・記録した文化財のほとんどは、沖縄戦で失われま

した。そのため、この資料は、琉球の文化財を復元する上で、極めて貴重なものです。首里城正殿の写真は、平成の首里城復元時の参考資料として使われました。また、円覚寺の壁画や歴代国王の肖像画「御後絵」などは、この写真資料でしか見ることができないものです。

(写真提供: ①～⑥ 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館)

国指定重要文化財(平28.8.17)



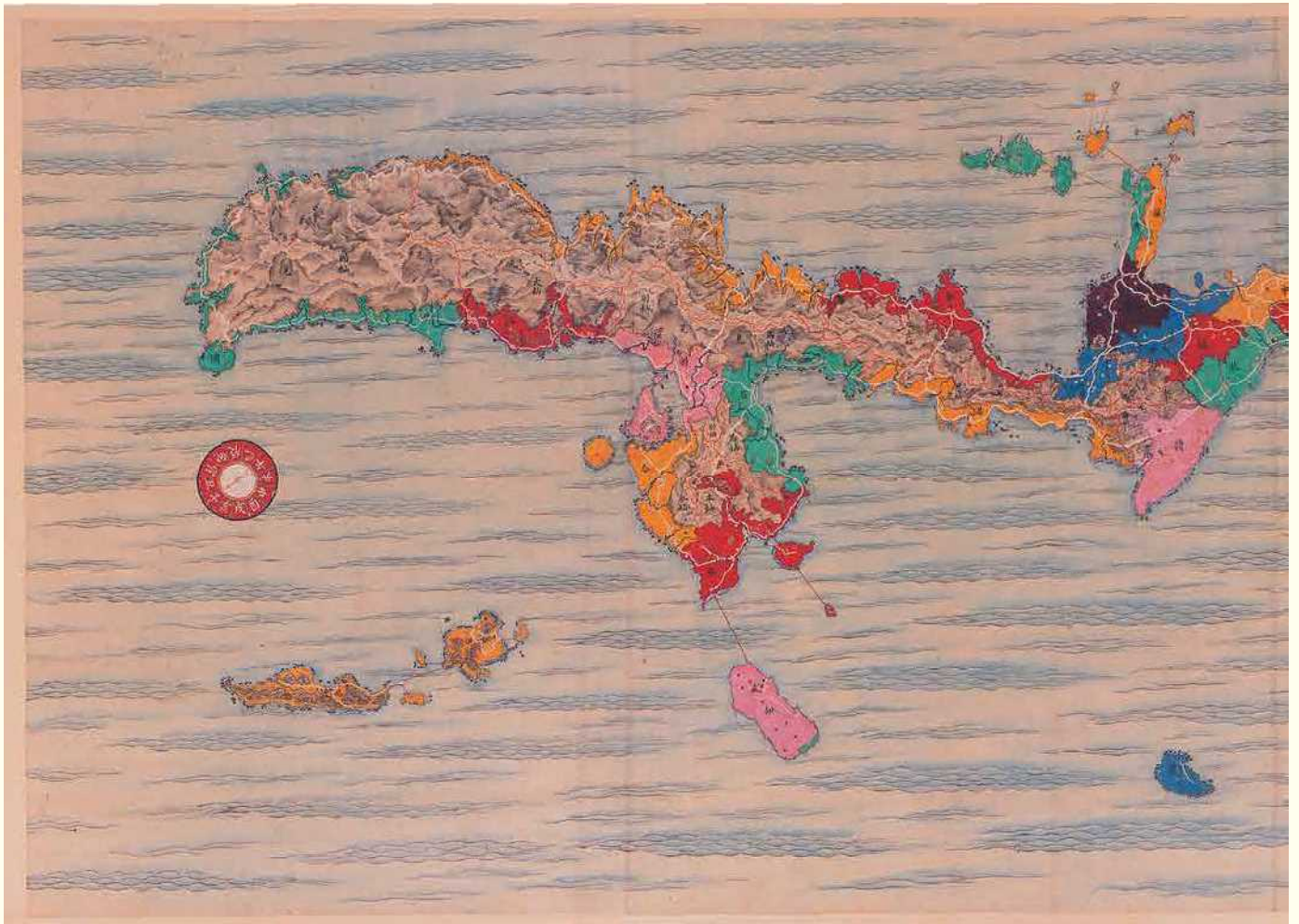
1785年に「みんなに、
きれいで
詳しい地図を
つくったんだね。」



フランスで開発された測量技
術を中国が取り入れて、それを
琉球の人が守ったんだ。その
技術を生かして、このような
正確な地図をつくったんだ
ね。今の地図と比べても、ほ
とんど変わらないよ。



18世紀、世界最高技術を生かした地図



フランスで開発された最新の測量技術が、1719(康熙58)年に中国経由で琉球国に持ち込まれました。1735(雍正13)年には、各間切の地図『間切島針図』が作製され、琉球の測量技術は急速に発達しました。この技術の特徴は、近代測量の三角点に相当する「印部石」を琉球国内に1万基以上設置して測量した点にあります。

1785(乾隆50)年には、『間切島針図』を

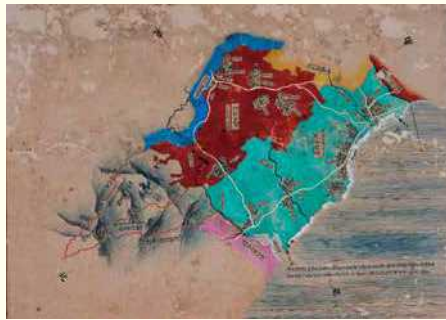
縮小、接合する技術によって、琉球国全体の地図「琉球国之図」が作製されました。これらの測量図から当時の琉球の測量技術は、世界的に見ても高いレベルであったと言えます。

間切図は、沖縄島の首里や那覇、島尻、中頭の地図5枚と、国頭間切の西部図1枚、伊平屋島の図1枚の計7枚があります。各図の方位は琉球国之図と共通し、縮尺はその4倍の約3万分の1となっています。紙のサイズと





① 国頭 (国頭間切 西)

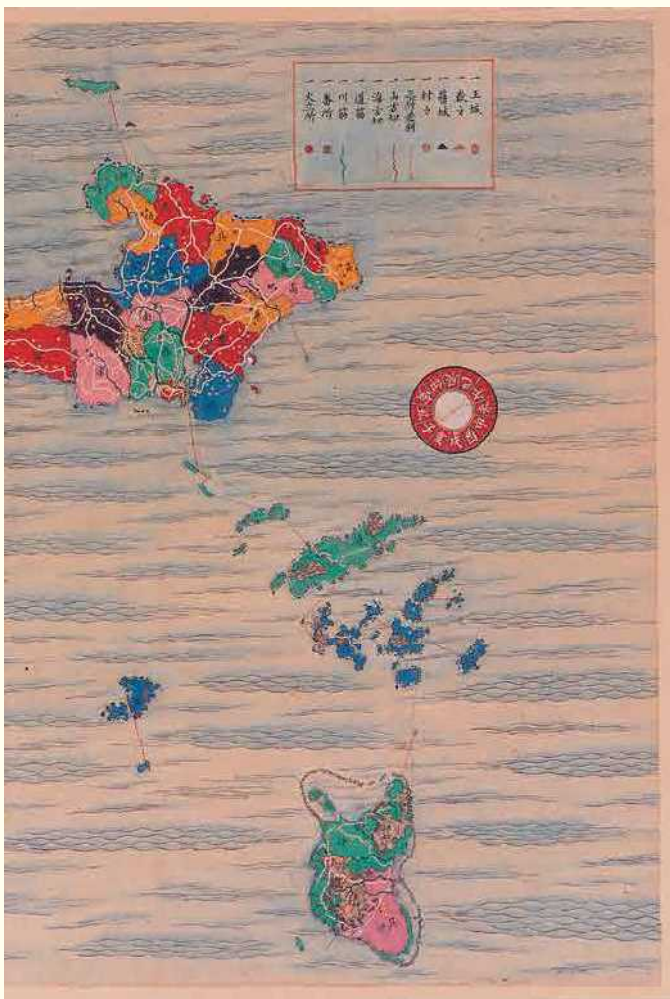


② 中頭中 (北谷間切・越來間切)

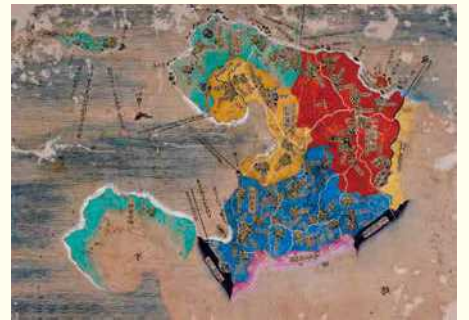


③ 中頭南 (西原間切・浦添間切・宜野湾間切・戸城間切)

琉球国之図



④ 町方・島尻西 (首里・泊・久米・那覇・南風原間切・真和志間切・小禄間切・豊見城間切)



⑤ 島尻東 (玉城間切・知念間切・佐敷間切・大里間切)



⑥ 島尻南 (兼城間切・高嶺間切・真壁間切・喜屋武間切・摩文仁間切・具志頭間切・東風平間切)



⑦ 離れ (伊平屋島)

材質は、琉球国之図とほぼ同じ楮紙となっています。また、描写の内容や彩色の方法、各間切の地色の配色に至るまで、ほぼ琉球国之図と一緒にです。

『琉球国之図』は、沖縄県立図書館ホームページの貴重資料デジタル書庫で画像を閲覧することができます。
<https://www.library.pref.okinawa.dex.html/jp/ar-chive/in>



(写真提供: 沖縄県立図書館・①～⑦ 沖縄県立博物館・美術館)